

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 10日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：22720068

研究課題名（和文） 幕末歌舞伎における河竹黙阿弥と市川小団次の研究

研究課題名（英文） Reseach of Mokuami Kawatake and Kodanji Ichikawa in Bakumatsu era

研究代表者

埋忠 美沙（UMETADA MISA）

早稲田大学・演劇博物館・研究員

研究者番号：20468846

研究成果の概要（和文）：

河竹黙阿弥の作品のうち幕末に上演された『青砥稿花紅彩画』『契情曾我廓亀鑑』『都鳥廓白浪』を取り上げ、各作品についてテキスト分析と演出分析をおこなった。また、いずれも黙阿弥研究に重要な作品でありながら、初演に忠実な台本が翻刻されていないことから、台本もしくは初演時に制作された合巻の翻刻をおこない、研究に供するために、その成果を広く一般に公開した。

研究成果の概要（英文）：

About "Aotozoushi Hanano Nishikie", "Keisei Soga Kuruwakagami", and "Miyakodori Nagareno Shiranami" who were performed among the works of Kawatake Mokuami at the end of Edo Period, the explication de texte of each work and production analysis were conducted. Though all were works important for Mokuami research, since the script faithful to a premiere was not reprinted, the script of the premiere was reprinted. And in order to present research, generally the result was exhibited widely.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：歌舞伎、幕末、河竹黙阿弥、市川小団次、正本写、浮世絵

## 1. 研究開始当初の背景

歌舞伎の歴史の中で、嘉永（1848）から慶応（1868）までの幕末の20年間は、極めて重要な時代の一つである。それは歌舞伎作者河竹黙阿弥によって、「鼠小僧」「十六夜清心」「三人吉三」「白浪五人男」等の、多数の傑

作狂言が生み出されたためである。本研究は、黙阿弥作品を分析し、幕末歌舞伎の実態の解明を目指すものである。

幕末維新时期最大の歌舞伎作者河竹黙阿弥（文化13年～明治26年）は、生涯で約360作もの作品を書いた。時代の変革期に活躍したため、作品の種類は時代の嗜好に合わせて

多様だが、真骨頂は幕末の世話狂言にある。鶴屋南北の死後、歌舞伎は新作を生み出す力を失い、有り物の狂言を繰り返して上演していた。そのような状況を打破したのが黙阿弥の世話狂言であり、市井の風俗とそこに生きる人々を写實的に舞台に登場させた作品は見物に大いに支持され、歌舞伎史を画期する業績を築いた。

黙阿弥研究は従来から盛んにおこなわれているが、私は従来の黙阿弥研究には次の二つの問題点があると考え、本研究を着想した。

#### (1) 作品研究の停滞

黙阿弥作品は約 360 作もあり、詳細が解明されていない作品が今なお数多く残っている。

#### (2) 演出研究の視点の欠如

従来の黙阿弥研究は、台本を中心に据えたテキスト研究が主流だったため、役者に関わる舞台面の研究、すなわち演出研究がおこなわれていない。舞台上で上演することを前提として書かれた演劇の台本は、役者の肉体を通してはじめて完成する。なかでも江戸時代の歌舞伎は、役者の芸を見せることが重要視されていたため、作品の成立には役者の芸風と意向が大きく影響していた。台本のみに乗っ取った研究は、歌舞伎研究としては不十分であり、黙阿弥の作劇の手法を見誤ることになる。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、「1、研究開始当初の背景」に記したように、黙阿弥作品を分析することによって、歌舞伎史において極めて重要な時代の一つである幕末歌舞伎の実態を解明することである。

従来、歌舞伎の作品研究は、台本や評判記といった文字資料を用いておこなわれてきた。しかし演出をも含めて分析するためには、文字資料の情報だけでは限界がある。本研究は幕末歌舞伎の様相を具体的に解明することを目指し、文字資料のみならず、絵画資料をも活用する。絵画資料によって、文字資料だけでは限界がある演出や作品解釈の変遷が浮びあがり、作者と役者の影響関係を示すことが可能となる。また絵画資料、なかでも役者絵の資料的価値を示しうる点で、幕末の歌舞伎研究にとどまらない意義がある。

### 3. 研究の方法

幕末の黙阿弥作品について、二つの手法を用いて研究をおこなう。

#### (1) テキスト研究

個々の作品について、歌舞伎や浄瑠璃の先行作はもちろん、読本・実録などの近世文芸

や、講談・落語などの舌耕芸といった他ジャンルからの影響を解明することで、黙阿弥の作劇法を明らかにする。これは近年の黙阿弥研究で発展し、主流となった研究手法で、延広真治『天保六歌撰』(85)を嚆矢とし、今岡謙太郎の研究(『おこよ源三郎』説話について)93、他)、吉田弥生『江戸歌舞伎の残照』(05)等の先行研究がある。これらの研究により黙阿弥の作劇法は明らかになりつつあるが、未だ解明されていない作品が数多く残っているため、これら先行研究からテキスト研究の手法を受けつぎ、作品研究をおこなう。

#### (2) 演出研究

二つ目の手法は、役者絵を中心とした絵画資料を活用した演出研究である。幕末には四代目市川小団次、三代目沢村田之助、八代目岩井象三郎、五代目尾上菊五郎、九代目市川団十郎などの名優がいたが、当時の役者たちがどのように黙阿弥の芝居を演じたのか、その実態は知られていない。なぜなら幕末は、元禄以降連綿と出版され続けた『役者評判記』の江戸評が掲載されなかったため、舞台の情報を記録した文字資料が極めて乏しいという、資料的制約があったためである。そのため、従来の歌舞伎研究では、幕末歌舞伎の舞台の様子は、同一の伝聞と記録を紹介するにとどまり、個々の作品に役者が具体的にどのように関与したかを、解明する研究はなされていない。私はこれまでも演出が完成する過程を分析し、黙阿弥作品の具現化には役者が積極的に関与していた事実を明らかにしてきた。この演出研究には絵画資料を活用してきた。絵画資料の製作時期を(初日の前後どちらか)峻別し、それぞれに描かれた情報を比較することで、台本執筆時の黙阿弥の演出意図と、役者の演技方針の違いを明らかにする手法である。絵画資料を用いることで文字資料からは知り得ない情報が浮かび上がり、演出が完成する過程を考証できたが、これは私が確立した研究手法であり、より多くの作品を取り上げる必要がある。

このように、二つの手法でテキスト研究と演出研究をおこない、幕末歌舞伎の実態の解明を目指した。

### 4. 研究成果

#### (1) 『青砥稿花紅彩画』の研究

文久二年に初演された本作は、黙阿弥の代表作で、五代目尾上菊五郎のために書かれた作品である。物語の素材は、延享期に実在した大盗賊日本左衛門で、その逸話は『秋葉権現廻船話』を代表として事件直後からたびたび歌舞伎の素材となってきた。この度の研究

では、日本左衛門を素材とした歌舞伎・浄瑠璃・実録・講談・読本などの多様な先行作を分析し、黙阿弥がどのように先行作を摂取したのかを分析した。その結果、黙阿弥は日本左衛門とその一味を、各種文芸の先行作にみられる大盗賊ではなく、極めて卑近な盗賊として描いていることを指摘し、それが小団次との提携で生まれた、いわゆる「白浪狂言」にのっとった造形であることを結論した。

あわせて絵画資料（役者絵・合巻）を検証し、白浪五人男の特徴的な扮装が、当時役者絵で流行していた刺青のモチーフを摂取していることを明らかにした。さらに「浜松屋の場」における日本駄右衛門の扮装が、史実を反映した頭巾姿から、頭巾をかぶらない姿に変更されていることを指摘し、それが役者の工夫によることを指摘した。演出を記録した文字資料が乏しい幕末歌舞伎において、この絵画資料によって演出の変化を詳らかにしえたことは、極めて大きな成果といえよう。

なお本作の良質な活字本が刊行されておらず、それが研究停滞の一因であることと考え、初演時に台本に基づき制作された合巻（正本写）の翻刻を行い、影印と併せて刊行した。

## (2) 『契情曾我廓亀鑑』の研究

慶応三年に上演された『契情曾我廓亀鑑』は、お静礼三という身分違いの男女の悲恋「小磯ヶ原」と、尾上岩藤の草履打ちを廓に移した「傾城草履打」という二つの物語が交互に展開する芝居である。このうち「小磯ヶ原」の件は、現行演目であり、従来から知られていた。一方の「傾城草履打」は優れた物語であるにも関わらず、本作が『黙阿弥全集』に収録された際にカットされたことから、今日まで知られていなかった。

そこで、演劇博物館に所蔵されていた全幕収録の初演台本と、初演時に出版された合巻（正本写）を基本資料にして、作品の全貌を紹介するとともに、黙阿弥の作劇法を分析した。「小磯ヶ原」の舞台設定の手法、御家騒動（鏡山の世界）を遊郭に移す書換えの手法、黙阿弥の下層社会の描写の特徴などを詳らかにした。

また上演時に出版された合巻を台本と比較すると、殺人場面の描写が全体的に軽くなる傾向にあることから、限られた人々に披露される歌舞伎（演劇）が、広く出回る出版物になる際に、官憲の目を意識して自主規制をおこなっていることを指摘した。

また、本作は、小団次の一周忌に上演された作品で、黙阿弥はその息子たち（市川左団次・子団次）の後見人である。本作には劇中劇として「曾我的対面」の場面が挿入されているが、この場面に当時の劇界の状況が当て込まれていることを指摘した。

さらに、『黙阿弥研究』には作品が部分的に収録されておらず、その全貌が知られていないことが問題であると考え、初演時に制作された合巻（正本写）の翻刻をおこない、影印と併せて刊行した。

## (3) 『都鳥廓白浪』と『桜清水清玄』の研究

嘉永七年に初演された『都鳥廓白浪』は、黙阿弥が人気作者になる以前に発表した初期作である。文政十三年上演の歌舞伎『桜清水清玄』（二代目勝俣蔵作）の書換え狂言だが、本作の成功が小団次と提携するきっかけとなったことから、歌舞伎史には必ず登場する作品である。また、女装の盗賊が活躍することから、黙阿弥が後年執筆した代表作『三人吉三廓初買』と『青砥稿花紅彩画』にも多大なる影響を与えており、幕末歌舞伎を研究するうえで、極めて重要な演目である。

しかし従来、本作は十分に研究されておらず、全貌も知られていなかった。例えば長らく全三幕の芝居と考えられてきたが、それは現在上演されるのが三幕であるうえ、『黙阿弥全集』が三幕しか収録していないためである。しかし本作は全六幕であり、従来公開されていなかった三幕の台本が、演劇博物館に所蔵されている。そこで作品の全貌を詳らかにするため、未翻刻の三幕の翻刻をおこなうとともに、松竹大谷図書館所蔵の『桜清水清玄』（計六幕）の台本の翻刻もおこなった。

また『都鳥廓白浪』の初演は、「お俊伝兵衛」という芝居と絡み合いながら、交互に展開する構成をとっていた。この「お俊伝兵衛」の件の台本は現存しないが、初演当時に制作された合巻（正本写）は「お俊伝兵衛」の件も併せて収録している。台本には残らない情報を記録する貴重な資料であることから、合巻の翻刻も併せておこない、作品の全貌を詳らかにした。

そしてこれらを基本資料とし、黙阿弥の作劇方法を分析した。本作の大筋は、原作である『桜清水清玄』にのっとっているが、随所に黙阿弥の工夫がみられる。本作最大の見せ場の「梅若殺しの場」が、上方で修行した小団次の演技を生かすために、義太夫と割り台詞にしたことは従来から指摘されていたが、その演出の変更を改めて分析し、小団次の見せ場がより多くなっていたことを指摘した。また、大筋は原作に則っており、黙阿弥の積極的な改変は確認できないものの、原作の複雑な綯い交ぜの構造を簡潔な筋立てに変更していること、原作の物語の破綻を整えていること、生き生きとした世話描写を多く加筆していること、などを明らかにした。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計 5 件）

- ① 早稲田大学国際日本文学・文化研究所監修、新曜社、『検閲・メディア・文学』（論文名：埋忠美沙「江戸歌舞伎の検閲」）、2012、29~37
- ② 国立劇場調査養成部（埋忠美沙、他 4 名）、国立劇場調査養成部、『〔未翻刻戯曲集・18〕桜清水清玄・都鳥廓白浪』、2012、331（解題執筆、校訂責任者）
- ③ 国立劇場調査養成部（埋忠美沙、他 2 名）、国立劇場調査養成部、『〔正本写合巻集・18〕都鳥汀松若』2012、242（校訂責任者）
- ④ 国立劇場調査養成部（埋忠美沙、他 1 名）、日本芸術文化振興会、『〔正本写合巻集・7〕青砥稿花紅彩画』2011、289（解題執筆・校訂責任者）
- ⑤ 国立劇場調査養成部（埋忠美沙、他 1 名）、日本芸術文化振興会、『〔正本写合巻集・6〕契情曾我廓亀鑑』、2010、265（解題執筆・校訂責任者）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

埋忠 美沙 (UMETADA MISA)

早稲田大学・演劇博物館・研究員

研究者番号：20468846